

# 戦乱と干ばつの中で

## 用水路を拓いた日本人②

「100人の医師を連れてくるよりも、1本の農業用水路を」とアフガニスタン北東部で活動している中村哲さんのお話の続きです。

周辺で戦闘が続く中、日本古来の蛇籠や江戸時代に作られた福岡県朝倉市の「山田堰」をヒントにクナール川に斜めに堰を作り、困難を乗り越え、ガンベリ砂漠に連なる全長約25kmの灌漑用水路が完成します。

以前、穀物自給率93%の農業国だったこの国は、戦乱や干ばつの影響で水・食料不足になり、治安が悪く、戦乱が絶えませんが、用水路の周辺地域だけは、様々な農作物をたくさん収穫できるようになり、故郷を離れて難民や兵士になっていた人たちも帰ってきて、約65万人も

の人が平穏に暮らせる基盤ができました。中村医師は、医師の仕事はいかに多くの命を救うかであり、ここでは、医療以前に水の確保が大切で、水源確保は医療の延長である、と語っています。また、「ペシャワール会」への寄付金を使った中村医師の取組で救うことができたアフガニスタン国民は、全体の約2%だが、もっと多くの人が、豊かに暮らせるように用水路や農地を拓くノウ

ハウを国全体に普及させ、今後も事業を継続できるよう、技術者を育てる訓練所も建設しようとしています。



欧米主導の援助がなかなか根付きにくい中、このイスラム文化を持つ農業国で、彼の事業が機能しているのは、現地の宗教や地域社会の伝統、文化を理解し、尊重するからだと言われています。

来年は、世界人権宣言が国連で採択されて70年を迎えます。かけがえない命を守り、一人ひとりが互いに尊重しあえるよう、身近なところで何ができるのか、いっしょに考えてみませんか。

(ペシャワール会会報より一部抜粋)

※この啓発ピラへのご意見、ご感想は ☎0745-82-2147または [jinken@city.uda.lg.jp](mailto:jinken@city.uda.lg.jp)へ